

CAGLIERO¹¹

カリエロ11

サレジオ会宣教ニュース N.44 - 2012年8月

サレジオ会宣教部門によるサレジオ会共同体・サレジオ・ミッションの友人のための通信



「ムスリム」のサレジオ会員



サレジオ会員の皆さん、サレジオ・ミッションの友人の皆さん、

2012年のこの8月、サレジオ会とサレジオ・シスターズのグループがサレジオ会ローマ本部に集まり、イスラム教徒の中で暮らすサレジオのあり方について話し合います。このような会合の一回目は、カイロで行われたセミナー（エジプト1988）、二回目はローマ（2001）での会合でした。学校、オラトリオ、教会、社会事業などで、イスラム教徒の兄弟姉妹たちと日常的に接している多くの国々での私たちの体験に基づき、意味、可能性、挑戦について共に考察したいと願っています。

すでに、インドネシア、パキスタン、いくつかのアフリカの国々の、イスラムの文化圏出身のサレジオ会員がいます。その中には、イスラム教とカトリックの両親の家庭出身者さえいます。ヨーロッパのサレジオ会員も、教育におけるバランスの取れた賢明なアプローチのために、イスラム教と文化について学ぶよう呼びかけられています。私たちの学校の数多くの同窓生の中には、イスラム教徒でサレジオンであることを誇りに思う卒業生たちもいます。Mondo e

Missione誌にフランチェスコ・ザンニーニ教授は書いています。「ハムディというあるエジプト人青年の言葉は今でもおぼえています。彼は自分を『ムスリムのサレジオン』と呼び、カイロのサレジオの学校の生徒であることを誇りに思っていました。教育を受けることに加え、ほかのキリスト者の生徒たちと共に暮らし、クリスチャンの友人や先生たちとの交流の中で、彼自身のイスラム教の信仰が豊かにされたのです。」(<http://www.missionline.org/index.php?l=it&art=4597>)

キリスト者とイスラム教徒の間の対話は、私たちの時代の最も重要なしるしの一つです。イスラムの教えの5つの柱だけでなく、若い人たちがほかの宗教を理解するのを助けるような、さまざまな伝統や習慣について知ることのできるリソースはたくさんあります。例えば、8か国語によるこのウェブサイトです：
<http://tinyurl.com/cajy4le>。

サレジオンが集まるこの会合は、「対話」というライフ・スタイルを日々、成長させるようにという、私たち皆への呼びかけです。それは偏見を取り除き、信仰の理由を深めさせ、愛と真理のうちに共に旅を歩ませます。

ローマでのこの研修会の中に分かち合われる内容の豊かさが、日々、イスラムの現実と間近に接しながら、その信仰のダイナミックないのちを深く知らないアフリカ、アジア、ヨーロッパのすべての会員の刺激となることを願っています！

Václav Clement
宣教顧問
ヴァツラフ・クレメンテ神父

歴史の中で、キリスト教信仰の名のもとに暴力が用いられたこともありました

「1986年にアッジジに集まった諸宗教の代表者が述べようとしたことを、わたしたちも強くしっかりと繰り返し述べたいと思います。これが宗教の真の本性ではありません。それはむしろ宗教の歪曲であり、宗教の破壊を招きます。これに対して、人はこう反論します。しかし、宗教の真の本性をどこから知ることができるだろうか。あなたがたの主張は、あなたがたの宗教の力が消滅したことから生まれているのではないか。他の人はこう反論します。あらゆる宗教のうちに示され、あらゆる宗教に適用できるような、宗教の共通の本性など存在するのだろうか。宗教に基づく暴力の使用に現実的かつ信頼の置けるしかたで反対したいなら、わたしたちはこれらの問いかけにこたえなければなりません。これが諸宗教対話の根本的な課題です。わたしたちはこの集会で、この課題をあらためて強調しなければなりません。わたしはキリスト者として次のことをいいたいと思います。たしかに歴史の中で、キリスト教信仰の名のもとに暴力が用いられたこともありました。わたしたちはこのことを認め、深く恥じ入ります。しかし、次のこともきわめて明らかです。これはキリスト教信仰の濫用であり、キリスト教信仰の真の本性にはっきりと反します。」

ベネディクト十六世 2011年10月27日 アッジにて

仏教徒だった私はキリスト者になり、 サレジオ会員、宣教師になった！



私の家族は仏教徒でしたが、姉の友人の中にカトリックの人たちがいて、姉は教会の活動に参加することがありました。ある日、姉は、カトリックになりたいと言い出しました。そのとき、私の父は家族全員に次の話をしたのです。祖父が亡くなる直前、父に語ったそうです。私たちの先祖がカトリックだったと伝え聞いたこと、そして、私たちのカトリックの親戚を探し出すようと祖父は父に頼んだのだと。父は姉にゆるしを与えただけでなく、驚いたことに、「おじいさんの望みに従い、家族の皆がカトリックになることを私は望む」と言ったのです。

家からいちばん近い教会はサレジオ会の教会で、姉はファビアン・ハオ神父様と知り合いになっていました。姉がこの話と父の願いをハオ神父様に話したところ、神父様は支援を申し出てくれました。数か月後、ハオ神父様は祖父の生まれ故郷へ行き、私たちの親戚を見つけたこと、しかもその一人は司祭になっていたことを父に伝えました。この知らせを聞いた父は、家族全員でカトリックに戻ることを決めました。家族全員が父の決断に賛成しました、私を除いて。私以外の皆がカテキズムの勉強を始めました。私は抵抗しましたが、ハオ神父様の助けによって、結局、家族と一緒にすることを決めました。1992年12月22日、私たち家族全員はハオ神父様に洗礼を授けていただきました。

その1か月後、父は癌の診断を受けました。数か月後に訪れた父の死は私にとって大きな痛手でしたが、それ以上に、病気の父への、また父が亡くなった後、私たち家族へのハオ神父様の支えに大きな感動をおぼえました。そして私は、ハオ神父様のところへ連れて行ってほしいと姉に願いました。奉獻生活がどんなものなのか何もわからないけれど、神父様のようにになりたいということだけ、神父様に話しました。こうして私は、家族を支えて働きながら志願生になりました。ドン・ボスコの伝記、アルテミデ・ザッティやシモーネ・スルジの伝記を読んだ私は、サレジオ会の修道士になる決意を強めました。

ある日、修練準備期の養成支部で古い書棚を掃除していると、迫害の中、キリストのために苦しみ亡くなったベトナムの宣教師たちについて書いた本を見つけました。これが、私の宣教師としての召命の種になりました。すべての人へ ad gentes の宣教師になりたいというこの望みを、私は修練長とポスト・ノビスの院長に相談しました。2000年に私は希望を申請し、パプア・ニューギニアに派遣されました。モンゴルでの宣教活動の準備として、ドン・ボスコ技術訓練校で学ぶためです。



ベトナムにもキリストを知らない人が大勢いるのに、なぜ海外宣教師になりたいのかと会員たちに聞かれるとき、私はただ次のように答えます。「私たちはほかの宣教師たちから本当にとくさんのものをもらった。彼らはそのためにいのちさえ差し出したほどだ。私たちも、キリストへの信仰を分かち合う義務があるように感じるんだ。」私たちの惜しみない心に、神様が豊かに祝福を与えてくださるにちがいないと私は思います。神様は、私の代わりに人をもっとたくさん管区に送ってくださるでしょう。

私は2004年から、モンゴルで、サレジオ会修道士の宣教師として幸せに働いています。サレジオ会の皆さんのおかげで、生きたあかしのおかげで、私のかたくなな仏教徒の心は動かされ、キリストへ、サレジオ会の召命へと導かれました。何よりも、私の上になされたすばらしいみわざを、神に感謝します！

ベトナム出身 モンゴルの宣教師 アンデレ・チャン・レ・フォン修士



サレジオ会の宣教の意向

イスラム教の環境、特にインドネシアで働くサレジオ会員のために

イスラムの環境の中で生活するサレジオ会が、あかしによって福音を告げる可能性を識別できますように。特に、インドネシアの若い委任統治区の会員たちのために。

8月初旬、中東・湾岸諸国、ヨーロッパ、アフリカ、アジア、サハラ以南のアフリカ、東アジアのイスラム教の地域で働くサレジオ会員たちが集います。イスラムの文化・宗教の環境の中にあるすべてのサレジオ会共同体が、あかしによる宣教と忍耐強い教育の取り組みの可能性を見いだすことができますように祈りましょう。特に、2010年に創設されたインドネシアの若い委任統治区のために祈ります。5つの共同体の60人の会員の多くは若く、ほとんどの会員がインドネシア出身です。

